

國學院大學博物館の 考古展示室の見学メモ ～主として縄文土器～

2017年12月19日見学、12月28日作成

MTO技術研究所所長
兼 加飾技術研究会 副会長
榊井捷平

國學院大學博物館見学概要

1. 國學院大學博物館の目的

長い伝統を持つ日本文化。その精神性「心」を、「モノ」から明らかにし、多くの方に知っていただくこと。

2. 見学の目的

プラスチックの加飾に興味を持ち、それを体系化して残していきたいと思い、リニューアルした加飾技術研究会で、その発展に注力している。その中で、「縄文土器」が日本における加飾のルーツだと思い、実物を見たいと思っていた。知人からそれは國學院大學博物館で展示されていると聞き、訪問して見学した。

3. 見学

・12/19(火) 10:00～12:00

縄文土器などが展示されている考古ゾーンのみを見学した。

ほとんど予備知識もなかったが、約10,000年ほど前に、こんな装飾が施されていたのかと感心しながら見学した。

・関連資料も一部参考にして、撮影した写真を中心にメモとして掲載する。
主要参考資料(*で示す)

*1 <http://history-of-japan.hatenablog.com/entry/2017/09/10/211412>

・一部、縄文土器に続き、弥生土器や土師器、須恵器も見学した。

縄文時代の概要

1. 縄文時代

縄文時代は、今から約1万6,500年前(紀元前145世紀)から約3,000年前(紀元前10世紀)で、世界史では中石器時代ないし新石器時代に相当する時代である。縄文時代とその前の旧石器時代との違いは、土器の出現や竪穴住居の普及、貝塚の形式などがあげられる。下記の6期に区分される。この頃の日本列島人は縄文土器を作り、早期以降定住化が進んで主に竪穴式住居に住んだ。

- ・草創期 今から1万6500年前～
- ・早期 紀元前8000年～
- ・前期 紀元前4000年～
- ・中期 紀元前3000年～
- ・後期 紀元前2000年～
- ・晩期 紀元前1000年～

2. 縄文土器

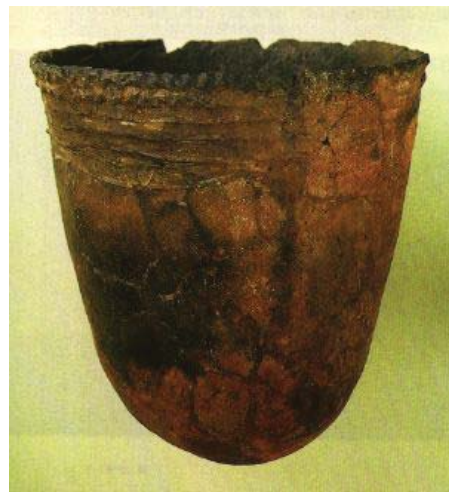
上記6期に区分され、時系列に展示されていた。

縄文土器は、実用(料理や貯蔵など)と呪術の両面の用途を併せ持っており、複雑な模様の物があったり、大よそ実用的とは思えない形のものがあつた。

土器は、見学していた時は、時代とともに確かに変化していると思ひながら見ていたが、整理するとなると結構難しい。

縄文時代草創期の土器

草創期には、底が丸い「丸底深鉢土器」が多かつたようです。写真の様な円孔模様、さらに縄目模様の物も既にあつたようです。

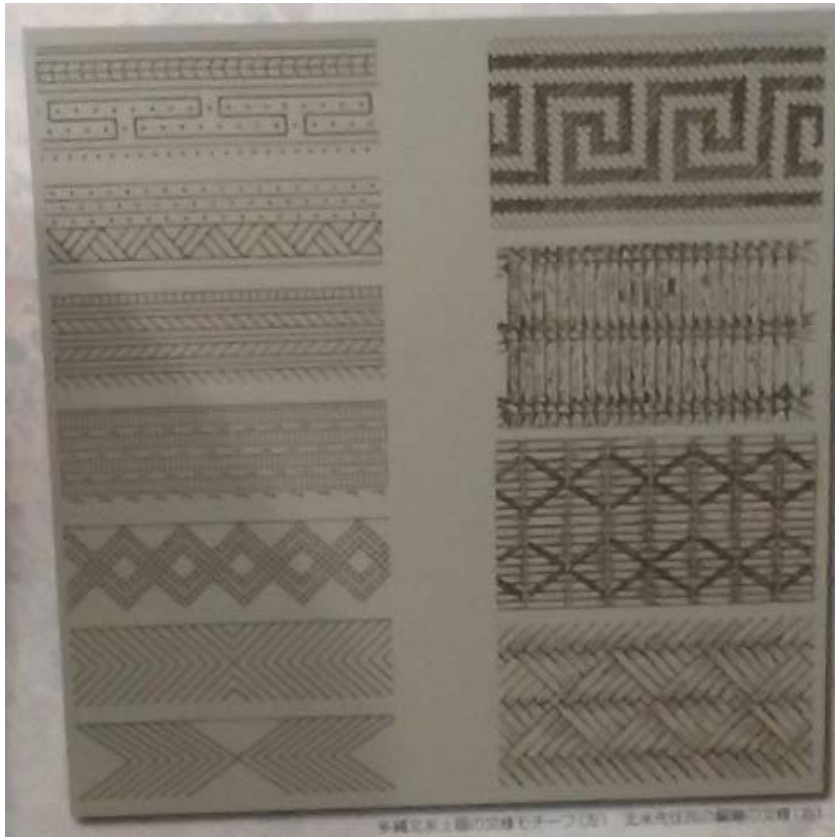


資料*1

模様には、下記の様にいくつか種類があつたようです。

- ・無文(むもん) : 模様がない
- ・隆起線文(りゅうきせんもん) : 細く盛り上がった線の模様
- ・爪形文(つめがたもん) : 爪で付けた模様

縄文土器の文様例



MTO技術研究所

縄文時代早期の土器

先のとがった「尖底深鉢土器」が現れ多く使われたようです。



資料*1

土器の底が尖っているため自力で立つことはできません。そのため、炉(ろ)の近く、和らいかい土にさして煮炊き用の土器として使用していたようです。

縄文時代前期の土器

前期は、「平底深鉢土器」が多かったようです。全面に深い縄目を施したものや盛り上げたもの等も出てきたようです。



底が平らなので、竪穴住居内の炉の近くで使用されていたようです。

資料*1

縄文時代中期の土器－1

中期は、「装飾が増え大型の土器」が使用されるようになったようです。豪華な「火焰土器」も現れたようです。



縄文時代中期の土器－2

「火焰土器」は、説明図のように豪華な装飾が施されているが、縄目模様は使われていない。2020年のオリンピックの聖火台としても検討されているようです。



MTO技術研究所

縄文時代後期の土器

後期になると「小型の土器」が主流となります。豪華さより実用性をメインに作られたようです。



画像の急須のような土器は、「注口土器(ちゅうこうどき)」と呼ばれ、酒を入れるために作られたと言われています。右の写真の様に開口部にウエーブを付けたものもあります。



縄文時代晩期の土器

後期になると芸術性が含まれた土器が作られるようになり、大きさも小さくなりより精巧なものが多く現れるようになりました。特に、「亀ヶ岡式土器」は、精度が高いとされています。



資料*1



弥生土器

弥生土器は、縄文土器とは違い呪術的要素がなくなり、実的なものがメインになりました。稲作が始まったこともあり、坪型や甕型、高坏などのより実的な形のものが増えてきます。

摂氏600～800度程度で焼成した赤焼き軟質土器で、貯蔵用の壺、深鍋としての甕(かめ)、盛りつけ用の鉢・高坏(たかつき)などがある。西日本のものは簡素な装飾をもち、東日本では縄文や曲線文様を複雑に飾る。



弥生土器(免田式土器など)

免田土器は、熊本県球磨郡免田地方の地名にちなんだ弥生時代中期末～古墳時代前期の土器。



土師器

土師器(はじき)とは、弥生土器の流れを汲み、古墳時代～奈良・平安時代まで生産された土器

須恵器と同じ時代に並行して作られたが、実用品としてみた場合、土師器のほうが品質的に下であった。



須恵器

須恵器とは、青く硬く焼き締まった土器で、古墳時代の中頃(5世紀前半)に朝鮮半島から伝わった焼成技術をもって焼いた焼き物のことをいいます。それまでの日本には、野焼きで焼いた縄文土器や弥生土器、土師器など赤っぽい素焼きの土器しかありませんでした。

